

インド・スタディツアー ～インドで子どもに会って考える旅 2011～ 報告書



ツアー実施期間:2011年8月26日(金)～2011年9月3日(土)

特定非営利活動法人 ACE(エース)

はじめに

この報告書は、2011年8月26日(金)から9月3日(土)に行われたインド・スタディツアー「インドで子どもに会って考える旅 2011」のまとめとして、ツアー参加者による訪問記録や感想文をもとに、特定非営利活動法人 ACE が編集し、作成しました。

学生から社会人まで幅広い年齢層の男女 18 名が本ツアーに参加し、それぞれが得た学びや体験が記録されています。本書が、児童労働の現状やそのとらえ方について、また本ツアーの概要について関心を持っていただくきっかけになれば幸いです。

特定非営利活動法人 ACE(エース)について

世界には、学校に行けず、重労働によりけがや病気の危険にさらされている子どもが 2 億 1500 万人います。特定非営利活動法人 ACE(エース)は、世界中のすべての子どもが権利を守られ、希望を持って安心して暮らせる社会を実現するため、市民と共に行動し、児童労働の撤廃と予防に取り組む国際協力 NGO です。1997 年に学生の有志によって設立されました。インドとガーナで、子どもを児童労働から守り教育を支援する活動や、日本国内で児童労働の問題を伝える啓発活動や、政府や企業への提言活動、ネットワークやソーシャルビジネスを通じた問題解決のための活動を行っています。

児童労働とは

子ども(18 歳未満)のうち、15 歳未満の義務教育就学年齢にあたる子どもたちの教育を妨げる労働、また、15 歳～17 歳の子どもも含めた危険・有害労働を、児童労働といいます。この定義は、国際条約に基づき、国際的に児童労働問題に取り組む組織の間での共通概念となっています。

児童労働に関する主な国際条約には、就業が認められる年齢を義務教育終了年齢である 15 歳とする「最低年齢条約(ILO 第 138 号条約)」や、最も危険で有害とされる労働の即時撤廃をもとめる「最悪の形態の児童労働条約(ILO 第 182 号条約)」があります。

児童労働を判断する基準は以下のようなものがあり、一つでも当てはまれば、児童労働となります。

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| ①教育を妨げる | 例) 労働によって学校に行けない |
| ②健康的な発達を妨げる | 例) 重い荷物運び、長時間同じ姿勢での仕事 |
| ③有害危険なもの(心身の健康、安全、モラル) | 例) 危険な刃物や機械、農薬などの使用 |
| ④搾取的である | 例) 売春・ポルノ、子ども兵士など |

一方、家の手伝いやアルバイトなど、教育を受けられ、子どもの年齢・成長度合いに見合うもの、また、健康的な成長を助けたり責任感や技能を身につけたりすることができるものは、子どもの仕事(Child Work)とされ、児童労働(Child Labour)には含まれません。

目次

はじめに.....	2
特定非営利活動法人 ACE について	2
児童労働とは.....	2
1. ツアーの概要	4
1-1 目的.....	4
1-2 訪問場所.....	4
1-3 全体の流れ.....	5
1-4 日程.....	6
1-5 滞在先・訪問組織について.....	7
2. 訪問記録	9
2-1 バル・アシュラム.....	9
2-2 「子どもにやさしい村」プロジェクト.....	13
2-3 ILO(国際労働機関)南アジア地域事務所.....	15
2-4 タラプロジェクト.....	16
3. 参加者による帰国後の活動	17
4. 参加者の感想	18
5. 参加者名簿	32

1. ツアーの概要

1-1 目的

スタディツアーは学びの旅

「スタディツアー」とは、単なる観光目的の旅行ではなく、NGO などによる国際協力活動の現場を訪れ、体験学習を通じて現地事情への理解や住民との相互理解を図ることを目的とするツアーのことを言います。

本ツアー「インドで子どもに会って考える旅」の目的

- ・ インドの児童労働の現状を知る
- ・ 児童労働問題にとりくむ活動について理解する
- ・ ACE が支援している「子どもにやさしい村」プロジェクトやパートナー団体の活動、支援の成果について理解する
- ・ 子どもたちや児童労働に取り組む人々、住民との交流を通じて、インドの社会状況、人々の生活について理解する
- ・ 児童労働問題の解決のために自分たちには何ができるかを考える

1-2 訪問場所

インド

ラジャスタン州ジャイプル県ヴィラトナガルの農村地域

- バル・アシュラム(子どものリハビリ施設)
- 「子どもにやさしい村」プロジェクトが実施された村

首都デリー

- BBA(ACE のインドのパートナー団体)事務所
- タラ・プロジェクト(フェアトレード団体)
- ILO(国際労働機関)南アジア地域事務所

※各訪問先の組織の詳細は、

「1-5 滞在先・訪問組織の概要」をご参照ください。



1-3 全体の流れ

2011 年度のスタディツアーは、以下の流れで、実施されました。

【ツアーの参加募集案内】 5月～7月



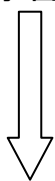
ツアー概要についての説明会の実施や、ウェブサイトなどを通して参加者の募集を行いました。

【参加者決定】 7月中旬



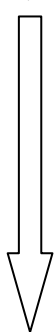
関東エリアの大学に通う学生を中心に 16 名の参加者が集いました。
(参加者名簿は 34 ページをご参照ください)

【学習会】 7月 23 日



参加者同士の自己紹介、児童労働について理解するための「感じてみよう 働く子どもの気持ち」ワークショップを行いました。また、ツアーの訪問先や参加にあたっての注意事項についての説明もありました。

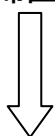
【ツアー実施】 8月 26 日～9月 3 日 (7泊 9日)



インドへ出発。7泊 9日にわたって現地の施設や NGO などを訪問しました。



【帰国】



全員無事に帰国しました。
帰国後は、各自ツアーを振り返りながら訪問記録や感想文を作成しました。また、ACE が出展するイベントにボランティアとして参加するメンバーもいました。

【報告会の実施】 10月 8 日

一般の方を対象にした報告会(東京)を行いました。ツアー参加者のうち 12 名が各訪問先やツアーに参加しての感想や学びを発表し、グループでの話し合いや質疑応答などを行いました。
報告会の後はインド料理屋で、懇親会も行いました。



1-4 日程

月日	活動内容	食事	交通機関
8/26(金)	10:30 集合:成田国際空港 第2ターミナル3階出発ロビー 12:30 成田空港出発(JL749) 17:35 デリー着(夜) [デリー:ホテル泊]	機内	飛行機
8/27(土)	午前 BBA事務所訪問 午後 デリー出発 ラジャスタン州へ出発(260キロ、車で5時間) 夕方 バル・アシュラム(子どものリハビリ施設)に到着 [バル・アシュラム泊]	朝 × 夜	専用車
8/28(日)	午前 バル・アシュラムについてのオリエンテーション 救出された子どもたちの話聞き取り、交流 午後 プロジェクトについてオリエンテーション バル・アシュラムの子どもと交流(スポーツ、遊びなど) 文化交流プログラム [バル・アシュラム泊]	朝 昼 夜	専用車
8/29(月)	朝 子どもたちと一緒に体操、ヨガ 午前 「子どもにやさしい村」プロジェクト実施地ラグナツプラ村訪問 午後 バル・アシュラムのスタッフとディスカッション [バル・アシュラム泊]	朝 昼 夜	専用車
8/30(火)	朝 子どもたちと一緒に体操、ヨガ 午前 バル・アシュラムの施設見学、デリーへ出発 午後 デリーに到着 [デリー:ホテル泊]	朝 × ×	専用車
8/31(水)	午前 ILO デリー事務所訪問 午後 タラ・プロジェクト訪問 夕方 ツアーの振り返り、ディスカッション [デリー:ホテル泊]	朝 × ×	専用車
9/1(木)	朝 アグラへ移動(240キロ、列車で2時間) 午前 世界遺産・タージマハール観光 午後 アグラからデリーへ出発(車で4時間) [デリー:ホテル泊]	朝 × ×	電車/ 専用車
9/2(金)	午前 デリー市内観光、買い物 午後 空港へ移動 ⇒1700 空港到着 19:35 デリー出発 (JL740) [機内泊]	朝 × 夜:機内	専用車/ 飛行機
9/3(土)	07:25 成田空港到着、解散	朝:機内	飛行機

1-5 滞在先・訪問組織について

1) BBA(ビー・ビー・エー)

インドで活動する ACE のパートナー団体です。児童労働のない社会を創り、すべての子どもが質の良い教育を受けられることを理念とし、1980 年に設立されました。BBA(Bachpan Bachpao Andolan: ヒンディ語)とは、英語で Save the Childhood Movement(子ども時代を救え運動)を意味します。児童労働者の救出とリハビリ、「子どもにやさしい村」プロジェクトの実施、市民への啓発キャンペーンや政府へのロビーイングなどを行っています。これまで 7 万人以上の子どもを児童労働から救出し、15,000 人以上の子どもにリハビリ支援を行っています。

ウェブサイト: <http://www.bba.org.in/> (英語)

<http://acejapan.org/modules/bulletin/article.php?storyid=287> (2011 年度スタディツアー報告 1)

2) バル・アシュラム

現地 NGO、BBA によって 1998 年に設立された、児童労働から救出された男の子のためのリハビリテーション施設です。子どもたちへの基礎教育や職業訓練、衛生教育、文化教育、人格教育などを行い、子どもたちの社会復帰をめざしています。子どもたちはバル・アシュラムで約 6 ヶ月～1 年間生活し、その後、家族の元に帰って学校に通ったり、18 歳以上なら仕事に就いたりして生活します。故郷に帰っても教育を受けられない場合は、バル・アシュラムに残って周辺の公立学校へ通う子どももいます。

ウェブサイト: http://www.bba.org.in/rehabilitation/bal_ashram.php (英語)

3) 「子どもにやさしい村」プロジェクト

「子どもにやさしい村(ヒンディ語で Bal Mitra Gram)」プロジェクトは、BBA の活動の一つです。このプロジェクトは、村から児童労働をなくし、村の全ての子どもが学校に通えるようになることを目的として、子どもの声を村の自治に反映させながら住民の自立を支援するものです。

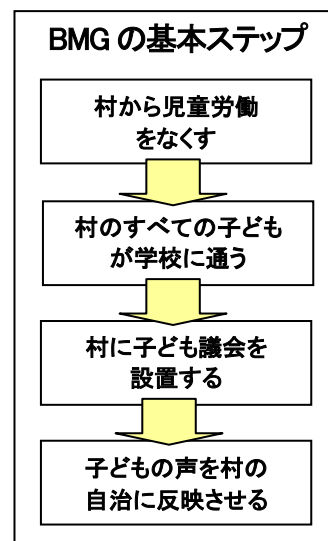
村では、子どもの就学を呼びかけるため、住民との集会や親の説得などが行われます。また子どもの代表を選ぶ選挙を実施して「子ども村議会」をつくり、子どもたちは、おとなの議会(村の自治組織)と連携して、学校の改善などにとりくみます。さらに青年グループや女性グループをつくり、子ども村議会の活動のサポート、子どもの就学の徹底や健康の改善、収入向上のとりくみなどが行われます。

ACE は 2002 年からこれまで BBA と共に、ウツタル・プラデシュ州の 5 つの村、ラジャスタン州の 7 つの村でプロジェクトを行ってきました。

ウェブサイト: <http://acejapan.org/modules/tinyd3/index.php?id=2> (日本語)

<http://www.bba.org.in/bmg/index.php> (英語)

<http://acejapan.org/modules/bulletin/article.php?storyid=288> (2011 年度スタディツアー報告 2)



3) タラ・プロジェクト

経済的に不利な状況に置かれる職人の自立を支援するため、1970年代から活動をはじめたインドのフェアトレード団体です。フェアトレード商品(アクセサリや雑貨製品)の製造、販売において、立場の弱い人々に対し、職業の場を提供するとともに、技術訓練などを行っています。また、児童労働を使わないことをフェアトレードの基準にしており、児童労働防止のためのアドボカシー活動や子どもの教育支援なども行っています。

現在、ウッタル・プラデシュ州、ビハール州、ハリヤナ州などで製品が生産されており、ヨーロッパ、日本などへの製品を輸出・販売しています。フェアトレードの国際ネットワーク WFTO(世界フェアトレード機関)にも加盟しています。

ウェブサイト:<http://www.taraprojects.com/> (英語)

<http://acejapan.org/modules/bulletin/article.php?storyid=289> (2011 年度スタディツアー報告 3)

4) ILO(国際労働機関)南アジア地域事務所

ILO(国際労働機関)は1919年に設立された、加盟国の政府・労働者・使用者の代表3者で構成される、労働に関する国際的な専門機関です。現在181カ国が加盟しています。

労働者の権利を守り、すべての人がよりよい仕事の機会を得る「ディーセントワーク」をめざし、雇用促進や社会保障充実のために働きかけています。このディーセントワークの中には、許されない形態の労働を廃絶することも含まれており、児童労働撤廃にも積極的に取り組んでいます。ILOは他にも、労働状況の調査、労働者の社会的な保護などを行っています。

<ILO-IPEC(児童労働撤廃国際計画)>

ILO-IPEC(International Programme on the Elimination of Child Labour)とは、「最悪の形態の児童労働」の撤廃に重点を置き、全ての児童労働をなくすことを目標として、1992年に開始されたILOの技術協力プロジェクトです。

インドでは1992年からIPECを実施しています。国内の100以上の大学、研究機関、使用者と共に、政府の児童労働政策や教育政策と連携し、行動計画の作成や調査の実施、意識啓発、子どもの救出とリハビリテーション、家族の収入向上に取り組んでいます。

ウェブサイト:<http://www.ilo.org/public/japanese/region/asro/tokyo/index.htm> (ILO 駐日事務所)

<http://acejapan.org/modules/bulletin/article.php?storyid=289> (2010 年度スタディツアー報告 3)

2. 訪問記録

2-1 BBA・バル・アシュラム

1) BBA 事務所でのオリエンテーション

訪問日:8月27日(土)

訪問場所:BBA 事務所

面会者:ダノンジェイさん、ジュビルさん(BBA スタッフ)

記録者:濱美奈、高澤綾



<問内容や話の内容>

BBA の歴史や活動内容、子どもの救出に対する想いなどをお話していただきました。

BBA は1980年にカイルシュ・サティアルティさんによって設立されました。BBA は団体の目的である、Bachpan(子ども時代)Bachao(守る)Andolan(運動)の頭文字をとって命名されています。当初 BBA は債務労働の問題に取り組んでいましたが、活動を続ける内に債務労働者の子どもも同じく労働者として働かされていることが分かり、児童労働の問題に直面しました。そこで1985年からキャンペーンやデモを行い、政府に働きかけ、86年には児童労働禁止法制定が実現しました。BBA は働かされている子どもの救出活動、救出された子どもの保護施設の運営、「子どもにやさしい村プロジェクト」の実施、児童労働撲滅をアピールするためのキャンペーン活動などを主に行っています。実際の救出活動にとっても力を注いでいるため、非常に現場主義の団体と言えるでしょう。使命は、働かされている子どもたちを救い出し、教育を与え、笑顔を守ることです。一番大変なことは、救出する子どもの雇用主から反発されたり攻撃されることです。スタッフや事務所に暴力行為を行うため、怪我人が絶えず今まで2人のスタッフが亡くなりました。しかし、そのような危険に直面しても、自ら守ることができない子どもたちを救い出すことを目標としています。このような懸命な努力により、今までに債務労働者を含む約8万人を救出しました。現時点で BBA の規模は、インド国内で5州に12のオフィスを設置、会員は世界で7万人にも及びます。活動に必要な資金は、そのほとんどを寄付金に頼っています。今後の展開としては、今までの活動を維持・拡大し、子どもがみんな子ども時代を楽しみ、教育を受けられるような世界をつかっていくことです。

<感じたこと、気づいたこと、疑問に思ったことなど>

BBA のインド事務所は、立地が住宅街の中にあるので、気軽に訪問する事ができる点が良いところだと感じました。その反面、雇用者の反発の矛先が事務所に向けられたとき、周辺の住民も被害を受けるのではないかと疑問に思いました。スタッフの方々は救出活動や自分たちの活動に情熱と誇りを持って取り組んでいるので、私も支援者としてそれに協力していこうと改めて思いました。(濱 美奈)

BBA スタッフの子ども救出への信念には本当にパワーを感じました。どんなに危険な状況もかえりみない姿勢は私には真似できないことですが、違う形で何かしていきたいです。色んな法律や約束事で子どもたちを守ることも大切ですが、彼らのように自らが現場に向かい、実際に救出することも非常に大事だと改めて思いました。“紙上の約束ではなく具体的なアクションを！”BBA はまさにこれを具現化した団体であると思います。(高澤 綾)

2)バル・アシュラムでのオリエンテーションと救出された子どもの話

訪問日:8月28日(日)

訪問場所:バル・アシュラム 小ホール

面会者:子どもたち

記録者:丹澤絵美、岩崎愛



<訪問内容や話の内容>

バル・アシュラムは、1998年に開設された子どもたちのためのリハビリ施設です。

BBAによって、工場やホテル、放牧などの労働から救出された子どもたちがこの施設で生活しています。14歳未満の子どもに対しては子どもが基礎学力を身につけて、学校へ通えるようになるようノンフォーマル教育を実施します。14歳以上の子どもに対しては技術を身につけて将来きちんとした仕事をもてるよう職業訓練(刺繍、仕立て、溶接、大工など)を実施しています。社会教育や子どもの権利について学んだり、精神的ケアのためのカウンセリングなども行っています。1年間バル・アシュラムで学んだ後も、BBAなどのサポートにより、地元に戻って学校に行けるようになるかなど、子どもの最善を考えた行動を心がけています。

<質疑応答> (子どもたちへの質問と回答)

Q BBAが救出しに来たとき、どう思いましたか？

A 他のところに連れて行き、また働かされるのかと思いました。でも、バル・アシュラムに来て、たくさん子どもたちがいたので、ここは自分を助けてくれる所だと分かりました。

Q バル・アシュラムに来てどう生活が変わりましたか？

A 勉強して知識が身につき、世界がどういうものであるか分かりました。

Q 一番好きな時間はありますか？

A 勉強をするときです。(数学が好きな子が多数いました。)

Q 将来の夢は何ですか？

A 軍隊、警察、技術者、先生など。(多数あがりました。)

Q 救出されていない子どもが沢山いることを知っていますか？

A はい、バル・アシュラムから出たらその子たちを助けて学校にも行かせてあげたいです。

<感じたこと、気づいたこと>

過去に児童労働で辛い経験をしていたにもかかわらず、私たちにはそのようなことがあったことを感じさせませんでした。その理由は、今の子どもたちの笑顔がとてもすてきたということ。また、児童労働について話すことを拒まない、むしろ知ってほしいという姿勢に驚きました。皆すてきな夢を持っており、ここまで子どもたちを立ち直らせたBBAの力はすごいと思いました。また、今回女の子の為の施設は見学できなかった為、救出された女の子たちはどのような生活をしているのかというの、気になりました。

3) スタッフと活動についてのセッション

訪問日:8月29日(月)

訪問場所:バル・アシュラム内図書館&食堂前広場

面会者:ジュビルさん(BBA スタッフ)、

「子どもにやさしい村」プロジェクトのスタッフ

記録者:二郎丸明里、具志堅詩織



<訪問内容や話の内容>

「子どもにやさしい村」プロジェクトは2002年から始まり、ラジャスタン州のみでも125の村でプロジェクトを行っています。2001年当時、既にバル・アシュラムは開設されていましたが、周辺の農村にも教育を受けていない子どもが多く存在している事を危惧したBBA創業者は、村民自身が主体となり問題を話し合う仕組みを整備することにより、児童労働をなくしていくプロジェクトを考案しました。

プロジェクト対象地の選定は、開始前に調査を行い、低カースト地域の中から20の村を候補地として挙げ、進学率や貧困率、政府による行政サービスの有無について調べた後、10の村をプロジェクト対象地として選定します。

村では、まず始めに、派遣された活動家達は、村長や村民と話し合いを重ね、村の問題を特定し、活動計画を立てて実施します。村に活動家を置いて、親への意識啓発キャンペーンなど様々なキャンペーンを村民と共に行う他、子ども達の学校入学手続きの手伝いや、子ども村議会のサポートを行います。

<感じた事、気付いた事、疑問に思った事>

スタッフとの交流会は、それぞれが訪問場所を見学した上で、疑問に思った事を直接聞くことのできる機会とあって、とても有意義な時間になったと思います。

プロジェクトの中で、子ども村議会での活動が、児童労働の撤廃にどのように影響しているのか、また「子どもにやさしい村」の活動を進める活動家はどのように対応しているのか、質問は多岐にわたって行われました。「子どもにやさしい村」での疑問は、「BBAがプロジェクトを離れた後の不安」というのがありました。また、「村議会で出された要請はなぜそんなに政府が協力的なのか」という疑問が挙げられました。

質問時間に限りがあったため、全ての疑問を時間内に解消することはできませんでしたが、私たちを含めてスタッフの方々が子どもたちに幸せになってもらいたい、という気持ちは一つであるという事を実感しました。ここにいた全員が、インドをはじめ、世界中で児童労働をしている子どもたちが教育を受けられるように、そして、笑顔で過ごせることを願っています。今回私たちに、プロジェクトの説明、施設の案内をして下さったスタッフの方々の想いを大切にしていきたいと思いました。

4)バル・アシュラム施設見学

訪問日:年8月30日(火)

訪問場所:バル・アシュラムの寮、庭、

ミーティングルーム、各職業の訓練施設、図書館

面会者:アディティアさん(バル・アシュラムのコーディネーター)

記録者:新谷太郎



<訪問内容や話の内容>

バル・アシュラムの各施設をアディティアさんに案内してもらい、説明していただきました。まず子どもたちが寝泊まりし生活する寮では、ベッドが100台ほどあり、勉強に集中する高校生を除いて、いろんな年齢の子を交えて部屋に配置しているそうです。また、子どもたちが描いた絵や、子どもたちの「名前・誕生日・夢」が書かれたものも飾られていました。音楽に興味のある子は音楽の勉強もできるように、音楽室もあります。庭にはザクロやブラックチェリーなどの多数の植物が植えられてあり、近くの村でも植林活動をしているそうです。

次にミーティングルームでは10:00~13:00でノンフォーマル教育が行われており、通常の学校で学べるレベルに達するまでヒンディー語・英語・算数・一般常識を学びます。「自分たちが教育を受けて、他の子にも教育を受けさせてあげよう」というスローガンを掲げており、子どもたちに教育を受けさせ救出するだけでなく、子どもの権利や児童労働の問題、社会問題などに対する意識を高め社会活動家に育てるということを目指しているそうです。

また訓練施設は、電気関係・大工・溶接の仕事の訓練施設があり、就職のあっせんもしているそうです。設立以来200人以上の子が就職しています。また、黒板の看板にその日の政治やスポーツのニュースが書かれ、新聞も自由に読め、子どもたちが世の中の情報を手に入れることができます。他にも、多数の書物やパソコンが置いてある図書館や医療室、プールなどの施設があります。

<ツアー参加者から子どもたちへの質疑応答>

Q 学ぶのは楽しいですか？

A はい、楽しいです。

Q 勉強をあまりしたくないという人はいますか？

A いません。(子どもたちは学ぶことが大好きなようでした。)

Q 子どもたちがバル・アシュラムに来て夢をもつきっかけ、経緯はなんですか？

A 職員や仲間と話をしたり、様々学ぶ中で、将来への夢や希望をもつようになります。

<感じたこと、気付いたこと、疑問に思ったこと>

一番印象的だったのはミーティングルームでの子どもたちの様子でした。見学させてもらった子どもたちは救出されたばかりの子たちだったようですが、子どもたちはアディティアさんがとても大好きなようで、全幅の信頼を置いているようでした。僕たちに対してもほとんどの子が歓迎的でしたが、中には不信そうな顔をする子もいて、その様子を見て「この子たちはおとなに働かされていたんだ」ということを改めて思い出しました。

2-2 「子どもにやさしい村」プロジェクト

1) 「子どもにやさしい村」の住民との交流①

訪問日:8月29日(月)

訪問場所:ラジャスタン州ジャイプル県ラグナツプラ村

面会者:アデーシュさん、マヘシュさん(以上 BBA スタッフ)

マノージさん(村の活動家)、カリーちゃん(子ども村議会議長)、

他青年グループメンバー、女性グループメンバー

記録者:今井仁志、粟津知佳子



<訪問内容や話の内容>

訪れたラグナツプラ村は、人口約 920 人、住民のほとんどが農家で、低カースト層など社会的経済的に立場の弱い人々が多く暮らしています。子どもの数は約 150 人。公立学校が1つありますが、現在 8 学年(小学 1~7 年生と中学 1 年生)に対し、教員の数は 4 人と、教員や教室の数は足りません。

バル・アシュラムから 3 台のマイクロバスに分乗して村へ向かいました。限られた短い滞在時間で、子どもたち、青年グループ、女性グループの話を聞きましたが、移動中や帰る時には村の人たちが集まって大騒ぎになり、最後には踊りを披露する女性も出るなどお祭りのようでした。

まず学校で子どもたちの話を聞きました。学校の環境改善のために政府に要請し、飲料水のポンプ式井戸を修理して使えるようにしたり、給食をつくるための調理場と校長先生の部屋を、建設したりしています。加えて、校舎を囲う塀の建設、教員の増員、電気の供給を子ども村議会が村議会に提案し、現在村議会で検討されています。以前は貧困層の家庭のみに電気が供給されていましたが、今は全家庭に電気が供給されるようになったそうです。

子ども村議会は全部で 10 人。この学校には中学 1 年生までしかいないため、村議会のメンバーのうち中学 2 年生の 4 人は他の学校に行っています。月 3 回ミーティングを行い、3 回に 1 回はおとなとの話し合いをしています。

次に住民の家にある集会場へ移動し、青年グループの話を聞きました。若者の大半は近くの都市やデリーなどに働きに出ています。1 か月に 4 回ミーティングを行うとのこと。今取り組んでいることの一つは、女子生徒のための別の学校をつくる必要が挙げられました。

最後に女性グループの話を聞きました。女性グループでは、月に 1 回話し合いを設け、妊婦の予防接種についてや、学校に毎日通えない子どもの問題などについて話し合うそうです。また、村の女性たちで自助グループを結成し、月に 50 ルピーずつ集め、病気のときや小規模ビジネスを始める時などに資金を必要とする女性に利子つきで貸しています。1 人の女性が主に話し、2、3 人の他の女性が恥ずかしそうに座っている姿が印象的でした。

<質疑応答>

Q 若者の大多数は出稼ぎとうことですが、出稼ぎに行っている人たちの意見は村議会に反映されますか？

A 帰省した時にいけば、出稼ぎに意見は反映されます。

Q 貸付はどのような用途に使われるのですか？

A 家畜を飼うためなどです。

2) 「子どもにやさしい村」の住民との交流②

訪問日:8月29日(月)

訪問場所:子どもにやさしい村

面会者:カーちゃん(子ども村議長)など子どもたち、
青年・女性グループのメンバー

記録者:田中 彩友美、金澤巧真



<訪問先について>

「子どもにやさしい村」プロジェクトが3年間の計画で実施されている村です。村単位での児童労働の問題解決を目的とし、農村の子どもも学校へ行けるようモデルをつくるために始まりました。今まで365カ所の村で「子どもにやさしい村」がつくれ、現在も95カ所の村でプロジェクトが実施されています。村は山の中にあり、村への道も巨大な山々など大自然に囲まれています。村の中も一つの道路を中心に繋がっていて、たくさんの山羊が飼われていました。学校は1回建てですが横に広く、生徒は机を持たず床に座って勉強をしていました。

<村の人々の話>

プロジェクトが実施される前は、子どもは放牧や農業の手伝いをして働くことが当たり前とされ、学校へ行くことは奨励されていませんでした。しかし、今は村の子ども全員が学校へ通っています。また家では電気もなく、水も通っていませんでしたが、今では要望が通り村にポンプ式井戸ができ、家にも電気が通るようになりました。子どもたちは月3回のミーティングを行い、内1回はおとなの村議会と共に行います。普段は個人の悩みや勉強の方法について話し合います。また女性による自助グループがあり、1人50ルピーをミーティングの度に集金して貯蓄し、生活に困ってしまった人に低い利子で貸し出す方法で収入向上に取り組んでいます。

<感じたこと>

村に到着した瞬間、人々の歓迎にとっても驚きました。時間が許す限り子どもたちと交流をしたところ、言葉が通じなくてもこんな楽しいのだと思いました。またこのプロジェクトは立場が弱い人々に本当に優しいプロジェクトだと改めて実感しました。女性グループの方が、「昔は村の習慣で、他人に顔を見せないように布をかぶっていたけど今では布なんていない!」と、笑顔で話してくれたのが印象的でした。そして、子どもたちに将来の夢を聞いたときに、たくさん素敵な夢が出てきて、その時の子どもたちの恥ずかしそうだけど輝いた目が印象的でした。子どもたちは皆、学習意欲に満ち溢れているところなど、逆に見習わなければいけないところもありました。

2-3 ILO(国際労働機関)南アジア地域事務所

訪問日:8月31日(水)

訪問場所:ILO デリー事務所

面会者:ランジットさん(CCLPプロジェクト・オフィサー)

記録者:鶴見早織、今井仁志



「搾取から教育へ」、という言葉が刻まれた記念碑

<ILO (国際労働機関)とは>

ILOは、1919年に設立された、労働に関する国際的な専門機関です。加盟国の政府・労働者・使用者の代表3者で構成されています。基本的人権や労働者の権利を守るための国際的な条約や政策を策定し、またそれが各国で実施されるよう支援するなどの活動を行っています。

ILOは、児童労働撤廃を目的とした技術協力プロジェクトであるIPEC(児童労働撤廃国際計画)を実施しており、インドでは1992年から活動を開始しました。政府による児童労働対策や教育の対策と連携し、児童労働が特に多い地域や分野などで活動が行われています。

さらに、集中的な児童労働対策プロジェクト(Converging against Child Labour Project)が2009年からパイロットプロジェクトとして開始され、特に危険有害な児童労働が多い地域10カ所で実施されています。対象は5-14歳の子ども19,000人、14-17歳の子ども2,000人、その家族5,000世帯となっています。活動内容は、子どもを危険労働から解放し、教育、技術訓練などの支援、また家族の雇用保障、社会福祉などによる自立支援をおこなっています。

<質疑応答>

Q 子どもに危険な仕事とはなんですか？

A 花火、絨毯、屋台、ホテル、家事使用人、サーカス、車の修理などに携わる仕事です。

Q インドのNGOと協力して児童労働をなくしたりするなどの取り組みはありますか？

A ILOは基本的には政府と連携をとってプロジェクトをしています。その地域で活動しているNGOがあれば、そこで連携して進められていることもあります。

<感じたこと・疑問点>

一言で労働と言っても、男女の労働問題や児童労働など色んな事をILOは行っていて、規模の大きさを実感しました。ただ、活動範囲が広すぎて上手く計画が進まない事も多いのではないかなと思いました。

2-4 タラ・プロジェクト

訪問日:8月31日(水)

訪問場所:タラ・プロジェクト デリー本部事務所

面会者:ムーン・シャルマさん(代表)

記録者:藤沢麻梨子、村田玲



<訪問内容と話の内容>

タラ・プロジェクトはインドのフェアトレード団体で、経済的に不利な状況にある手工芸職人の自立を支援する活動を行っています。インドでは、多くの生産現場がインフォーマルな形態で、生産者が長時間重労働を強いられていたり、きちんと賃金が支払われていないことが多くあります。賃金がきちんと支払われないのは、仲介業者が公平な値段で購入していないのが主な原因です。なので、タラ・プロジェクトでは、その仲介業者を排除し、生産者が生活を保てるよう、安定した仕事を維持提供し、労働に見合った正当な賃金を生産者に支払うフェアトレードを実践しています。また、その生産過程で児童労働を使わないことも方針の一つです。

フェアトレードを推進する運動は、1950—1960年にアメリカで始まり、インドでは1970年代に数人の有志によって活動が始まり、現在のタラ・プロジェクトが作られるに至りました。タラ・プロジェクトでは、生産者が搾取されないように、労働者として与えられるべき権利についての情報を知らせ、仕事の機会を提供しています。また、働く人の能力強化やインフラ整備を実施したり、差別を無くす、環境保護の重視、児童労働を使わないなどといった10のフェアトレード基準に基づいて活動しています。

フェアトレードが社会でより大きく普及するには、国内外の若者や消費者がフェアトレードを支持することやメディアに訴えかけ広く知らせることが重要です。若者は次世代の世界を変える力を持っており、特に先進国では多くの製品を海外から輸入に頼っているため消費者としてフェアトレードに関心を持ち、支持することが必要不可欠になります。

生産者の能力強化では、代々その地域や家庭で受け継がれている手工芸品製造の伝統技術を絶えさせないために、技術訓練も行い、さらに新たな技術も教えています。

インドではカースト制度は法律上廃止されているものの、まだ国民の間には習慣として根強く残っており、手工芸職人も同じく差別され弱い立場におかれた人々です。タラ・プロジェクトでは職人が生活を向上できるよう、国が定めている最低賃金よりも少し多い賃金を支払う努力をしています。しかし不景気や、原材料などの物価上昇による生産コストの増加などの影響で、注文が減るなどしており、あまりよい経営状況とはいえません。日本の消費者も、フェアトレードにもっと関心を持ち、普及するようぜひ協力してください。

3. 参加者による帰国後の活動

スタディツアー報告会

日時: 2011年10月8日(土)15:30-17:30

場所: JICA 地球ひろば(東京)

主催: ACE

報告: 川崎桃恵(ACE インターン)



2011年10月8日、一般の方向けの報告会を開催し、スタッフ、ツアー参加者がスタディツアーについて、発表しました。ツアー参加者にはそれぞれの訪問先の説明や感想、そしてツアー全体を通しての学んだことや感じたことを発表してもらいました。そして、一般の参加者とツアー参加者を含めた小さなグループをテーブルごとにつくり、質問にツアー参加者が応えるという時間を設けました。一般の方にとっては、まだ記憶の鮮明な参加者の感想などを聞けるよい機会になったと思いますし、ツアー参加者にとっては、人に伝えることによって、学んだことをより深く考える貴重な機会になったと思います。

また、休憩時間にはインドでよく飲まれている香辛料の入ったチャイという紅茶を皆さんに飲んでもらいました。最後に、それぞれのグループから出た質問をスタッフが応えるという形をとりましたが、みなさんとても真剣に質問を考えてくださり、内容の濃い報告会とすることができました。

ツアー中に、参加者にツアーを通して「自分にできること」を考えてもらった時、「学んだことを自分の中だけに留めるのではなく、周囲へと伝えていく」というのが最も多い回答でした。今回の報告会が、ツアー参加者にとって今後それぞれの生活のなかで「周りに伝える」ということの大きなきっかけとなればと思います。

グローバルフェスタ

日時: 2011年10月1日(土)、2日(日)

場所: 日比谷公園

報告会の約一週間前には、グローバルフェスタがあり、ACEも出展させていただきました。

ツアー参加者も2日間に渡ってボランティアとして参加して、パネルなどを使ってインドや児童労働に興味のある来場者にツアーで学んだことなどを説明しました。

またこの他にも、それぞれ大学のゼミや広報新聞などを利用してツアーで学んだことを伝えている参加者もいます。



4. 参加者の感想

スタディツアーで学んだこと



粟津 知佳子
NGO 職員(デリー在住)

ACE のスタディツアーに参加したのは、仕事でインドに滞在している間に、インドにおける日本の他の NGO の活動内容も知りたいと思ったことがきっかけでした。特に興味があったのは、貧困を背景にした児童労働という問題にどう取り組んでいるのか、児童労働をなくすために人々—子ども、親、雇用者、消費者—の意識変革にどう取り組んでいるのかという点です。背景にある貧困をなくすことはとても規模が大きすぎて、一団体の手には負えません。子どもを学校に行かせずに働かせるのは悪いことだとわかっている、それでも食べるためには働きに出さざるを得ないという状況は、インドの農村地域ではよく聞く話。その中でどう人々の意識に働きかけ、行動を変えていくのかという手法に興味がありました。

BBA の事務所や子どもにやさしい村の訪問を通じて、その疑問に対する答えの一部が見られたことは大きな収穫でした。特に子どもにやさしい村プロジェクトを通じて、子ども自身に学校へ通うことの大切さを訴えるメッセージの発信者になってもらうこと、子ども村議会を設置することで子どもの価値観をおとなが真剣に受け止める場づくりを行っていることは、住人全体の意識を変える上で効果的だと感じました。また、3年間という短いプロジェクト期間後もその「意識」が根付くように、毎日くぐる家の入口に貼られたプロジェクトのステッカーなど、目に見える形で意識に訴えかけることも、小さなことですが重要だと思います。

インドの社会は急激な勢いで変化を遂げている最中です。中上流階級の消費者には、児童労働・搾取を行わない「フェア・トレード」ならぬ「フェア国内消費」が、そろそろ価値観として受け入れられる素地ができつつあるのではないかと感じます。また CSR として、子会社・下請け会社も含めて児童労働をなくすことに取り組む企業も出てきてもおかしくないでしょう。今回のツアーで見たのは搾取される側の子どもとその子どもを送り出すコミュニティに対する取り組みが主でしたが、今後児童労働廃止に取り組む団体も、企業・消費者に向けた働きかけに力を入れ、またそれが具体的な成果に結びつくよう期待したいと思います。

貧困を背景にした途上国の児童労働の当事者と、先進国の消費者との出会いの場をつくり、いわば両極端にいる両者を結び付けるこのツアーはとても貴重だと感じました。「世界はつながっている」という言葉は、一見抽象的ですが、事実です。見えにくいつながりを日常生活の中で意識しながら、ツアーの中で宣言した通り「責任ある消費者」でありたいと思います。

努力できる素晴らしさ



金澤 巧真
学生

村人がコップを手に瓶に入っている水を飲むところを見ると、皆決して口につけず流し込むように飲んでいました。コップを全員でシェアする為です。私はこの光景が一番印象的で、村の一体感を感じました。私たちは村にて学校を見学し話を聞き、その後子ども・青年・女性議会の話を聞き最後に家を訪問しました。この流れの中で、その時村にいたほぼ全員の人々が私たちに付いていました。それ程好奇心が強く、特に子どもたちは私がリズムカルに声を挙げると、それを真似てくれました。また、握手を求められて握ると、力いっぱい握って私の反応を楽しんでいました。この様に、非言語コミュニケーションにとっても積極的な人々でした。学校では、机もなく地べたでの勉強ですが子どもたちは皆勉強に意欲的に見え、先生も子どもたちと友達のような存在で在りたいと語っていました。昔はレンガ造りや放牧、農業が主な仕事でしたが、今では子どもたちは自由に夢を見ていました。教師や医者、エンジニアとその種類は多種多様でした。

私は、自由に職業が選択できそれに向かって努力できることの素晴らしさを知りました。私は就職活動を控えた学生ですが、いつもどの職業につくべきかを悩んでいます。それが億劫にさえ感じていました。しかし、産まれた環境で将来を決められてしまう子どもたちを知ると、自分の道を自身で決めることができ、努力をすることができる環境自体が素晴らしいのだと気づきました。子ども議会は、子どもたちが努力することによって環境を変えていくことを経験できるとも貴重な場です。また、インドでは輪廻転生の考えが強く、現在の身分は前世の行いによるものだと信じられています。そして、今を良くするのではなく来世を良くしようと考えられます。こう考えられてきたのは恐らく、今を変える努力をすることのできない環境だったからではないでしょうか。その点で、「子どもに優しい村」は努力をすることができる環境です。このような環境がインド中に、世界中に広がっていくべきです。

インドの文化で、言動は良し悪しに関わらず自分にかえってくるという考えがあります。私はこの文化を学び、世界60億以上の人々は皆複雑に絡みあっており、一つの行いは様々な人を経由し自身へ還ってくると思いました。インドの子どもたちに届くように、私は努力します。周囲に良い影響を与えられる人物になるために。

スタディツアーに参加して



具志堅 詩織
学生

児童労働に興味を持ったきっかけは、数年前に見たドキュメンタリー映画だった。その映画の中には、小さな部屋の中で腰を曲げ小さくかがみながらサッカーボールを作る子ども達の姿があった。当時サッカー部員として毎日サッカーに明け暮れていた私にとって、その光景は心が痛むものであり、自然と児童労働に関心を抱くようになっていた。

大学で子どもの権利について勉強しているため、日本にて児童労働の原因や現状について学ぶ機会は多くあったが、実際にインドを訪れてみて、児童労働に対する考え方は大きく変わった。情報をインプットするだけでは何も変わらない、何か行動しなくては。

今回のスタディツアーでは、たくさん子ども達に出会う事ができた。バラアシュラムにて、鬼ごっこをして本気で一緒に走ったり、ヒンディー語が全く分からない私に対し子ども達が熱心に言葉を教えてくれたり。「子どもにやさしい村」では、皆で手をつないで道で踊ったりもした。そんな子ども達とのやりとりの中から気付いた事は、結局子ども達は特別なわけではなく、普通の子ども達だということ。思いやりも持っていれば、向上心も忘れてはいないということ。

子ども達が働く理由は様々で状況も複雑だから、一つのプロジェクトが全体を解決できるものじゃない。でもだからこそ、世界中多くの人々の目がインドの子ども達に向かなくてはいけないと思う。長期的で視野の広い支援を行うためには、問題の根本から改善していく必要があるけれど、どんな支援でも根本的には対「人」だという意識が不可欠だと、スタディツアーに参加して強く感じるようになった。応急処置的な支援は続かないけれど、支援の先に子ども達一人ひとりがある事を忘れてしまえば、どうしても援助の手から多くの子ども達がこぼれ落ちてしまうのではないかな。

簡単に会いに行けないような、インド奥地の小さな部屋で働かされている子ども達の存在を、どうイメージしてどう関わっていけば良いのだろう。私にできること、私だから出来ることって何だろう。BBAの方のように直接救出に向かうのは私にはできないし、ACEの方のようにNGOで仕事として活動していく事も今の私には厳しい。でもだからこそ、今の私にも出来る「小さなアクション」をコツコツつけていきたいと思う。仕事を通して子どもにやさしい会社・経済システム作りにも貢献したり、友達と情報を共有し注意深い消費者を心がけたり、私だから出来ること。簡単に支援は完成するわけではないけれど、このスタディツアーで得たこの気持ちを風化させずに、ずっと持ち続けていきたい。

インドで子どもに会って考える旅 2011 -インドで学んだこと-



二郎丸 明里
学生

7泊9日という長いようで短い期間で、私が最も印象に残った出来事は、最初に訪問したBBAの事務所で聞いた活動内容でした。私は、スタッフの方が命がけで子どもたちを助け出そうとする活動に驚きました。また、BBAが救出された子どものアフターケアを行うだけでなく、政府や警察をも児童労働の撤廃活動に取り込むようになったことです。インド全体で児童労働は、かなりの数になりますが、このBBAの地道な活動が市民や政府、警察を児童労働の撤廃活動に結び付けているのだなと実感しました。ILO事務所訪問の時も言われていましたが、こうした問題には市民、政府、地域社会が一体となって取り組むことが問題の解決になるのだと改めて分かりました。

バル・アシュラムの子どもたちとの交流は、とても不思議なものでした。子どもたちと遊んでいるとき、私は子どもたちが本当に過酷な労働をさせられていたという事実が信じられませんでした。遊んでいるときのキラキラした笑顔は、BBAスタッフの活動の源になっているのだらうと思いました。

子どもたちからは、教育を受けることの本当の大切さを感じました。インドには特有の身分制度、カースト制度がありますが、それも教育を受ける事で以前ほどの差別を受けることはないそうです。子どもたちは本当の意味で自分の身を守るために、勉強をしているのだと思いました。

今の私にできることは、インドで見たり聞いたり、学んだことを今後の勉強に役立てること。そして、一人でも多くの方に伝える事だと思いました。

インド・スタディツアーで学んだこと



新谷太郎
学生

今回のスタディツアーではインドの児童労働の現状・取り組み・課題について多くのことを学ぶことができました。また、意識の高い人たちと多くの時間を共有し、今まで自分になかった考え方やより深い考えに触れることで、自分の意識も高まりました。

バル・アシュラムで子どもたちと遊んだりして触れあえたのもとてもいい経験になりました。本当にこの子どもたちが児童労働をさせられていたのかと思うくらい思いっきり遊ぶのを楽しんでいて、もしかすると今まで十分に遊べなかった分を取り戻そうというような気持なのかなとさえ思いました。そしてその姿こそが子どものあるべき姿であると改めて思いました。一方、移動中のバスの中から町を見ていると、物乞いをする子どもたちや客引きをする子どもたちなど、おそらく学校には言っていないだろうなという子どもたちの姿もあり、確実に児童労働があるということも感じました。そのような子どもたちがバル・アシュラムの子どもたちのようにしっかり教育を受けて、楽しく遊べるようになるようになってほしいし、なるべきだと思いました。

そして今回のツアーで特に児童労働の撤廃に向けて大切だと思ったのは「意識」です。子どもたち自身の意識・親の意識・周りの住民の意識・政府の意識・ILOの意識・児童労働によって作られた商品を買ってしまっている外国人の意識、それらの人たちの意識が正しいものになり、行動を起こせるようになると児童労働はなくなるのではないかと思います。そして自分にできることは日本人の意識を少しでも高めることだと思います。海外からのアプローチは現地の人の意識を変えるのにとっても有効だという話も聞けたので、少しでも多くの日本人が児童労働に興味を持って、そのために行動を起こせるように、これから自分も何か行動をしていながら、周りの人々に伝えていくということをしていきたいと思います。そしてACEやBBAがもっと有名になっていけば、児童労働の撤廃に近づいて行くのかなと思います。貴重な体験をどうもありがとうございました。

—インドの子どもたちと触れて—



高澤 綾
学生

私がまだ小学生だった時、あるテレビ番組と出会った。「世界がもし100人の村だったら」という番組をご存じだろうか？思えばこの番組との出会いが、私が初めて児童労働を知るきっかけになったものだったかもしれない。あの時はただひたすら「可哀想、ひどい、助けたい、なんで？」といった単純な感情がずっと頭の中をぐるぐるしていた。大学生になった今、私は児童労働についても学習している。

今回のインド・スタディツアーの中で、児童労働という同じ問題に興味を持ったメンバーと出会い、それをなくすために必死に取り組んでいる様々な団体を訪問し、そして多くの子どもたちと触れ合ってきた。毎日毎日本当に考えることの多かった7泊9日間で、色々な角度から児童労働を見たように思う。働かされている子どもたちを命懸けで実際に救出しているBBA団体、その子どもたちに教育や遊びの機会を与えてアフターケアを行っているバル・アシユラムという施設、子どももおとなと同様に意見を主張し共に村づくりに貢献できる子どもにやさしい村プロジェクト、国際組織として問題に取り組むILO団体、そしてフェアトレードを通して児童労働をなくそうとしているタラプロジェクトなど、それぞれの団体があらゆる面から児童労働撲滅のためにアプローチをかけている。日本で学習している時は具体的な解決策が見えてこなかった私にとって、このような団体が存在し、実際に活動しているという事実は新しいものだった。

そして何より私にとって貴重だったのは、やはり子どもたちと触れ合っていた時間である。彼らと汗だくになりながら遊んでいると、辛い過去があるようには全く思えない。アルファベットを何度もなぞって熱心に勉強しているところを見ていると、微笑ましい気持ちになる。友達同士でふざけ合っている姿や少し照れながら自分の夢を語る姿は、普通の子どもの何ら変わりはない。その時に感じた想いは、小学生の時に感じた想いとは大きく変わっていたように思う。あの時よりも彼らのいる状況をしっかり噛み砕き、哀れむだけでなく、自分には何ができるのかという疑問に真剣に向き合えるようになったと感じた。彼らのきらきらした笑顔は、結局自分は何もしてあげられないのだとどこかで卑屈になっていた自分を変えてくれたように思う。私の好きな言葉の一つに“小さな事を大きな愛を持ってする”というのがあるのだが、まさに私が今できるのはこれではないかと感じた。具体的には、自分が発信源となり身近な人に児童労働を伝える、考えて買える消費者になる、小額でもできる範囲で資金援助を行う…などである。このツアーで見て感じたことを忘れずに持ち続け、児童労働がなくなるその日までこの問題を考え続けていきたい。

スタディツアーに参加して ～子どもの権利をまもること～



田中彩友美
学生

私はアジアの途上国に住んでいたこともあり、元々途上国について、特に子どもの問題について興味があり、実際に自分の目で状況を見てみたいと、今回このスタディツアーに参加しました。

私がこのスタディツアーで1番楽しみにしていたことは、現地の子どもたちとの触れ合いです。バル・アシュラムでは、過去に児童労働をしていた子どもたちに直接質問をする機会がありました。児童労働についての質問は、過去の傷をえぐってしまうようで、正直投げかけづらかったのですが、そのことを子どもたちに聞くと、「たしかに児童労働は辛い過去ではあるけれど、そのことについてもっと多くの人に知ってほしいから、だから僕は質問されても平気。」と真剣なまなざしで話してくれました。それだけ児童労働の問題について真剣に考えていて、多くの人に児童労働の現実を知らせることによって、自分と同じような経験をする子どもを少しでも減らしたい、とっていて、小さい子どもたちなのに本当にすごいと感銘を受けました。また勉学に対してもとても熱心で、強制させられていないのに10才くらいの子が自ら新聞を手にとって読み始めたり、自由時間も図書館で勉強をしたりしていました。私より年下の子が、英語を流暢に話していたのを聞いたときには、驚きと敗北感とで私も頑張ろうと刺激を受けました。

今回このスタディツアーに参加して、BBA やILO など全力で子どもを守ろうと、児童労働を防ごうとしている機関がたくさんあることが分かりました。どの機関も、命がけで子どもを守るという姿勢で、1人1人の子どもの人権を大切にしている、だからこそ過去に児童労働をしていた子どもたちも、今はキラキラした素敵な笑顔で笑えるのだし、勉学に真剣に取り組めるのだ、と思いました。私はこのスタディツアーに参加する前は、将来は国を担っていく子どもなのだから児童労働はやめさせるべき、と考えていました。しかし国を担っていく、ということの前に子どもとしての人権を守り、きちんと確立させていくことが大事なのではないかと思うようになりました。そのためには、おとなも子どもの権利をきちんと理解し、児童労働が起らないように、しっかりと監視をしていくことが大事だと思いました。

このスタディツアーは毎日、様々なプログラムがあって本当に刺激的で、同じテーマに関心がある仲間ともたくさん話し合うことも出来て、とても有意義な9日間になりました。インドで感じたこと、学んだこと、貴重な経験をこれからも忘れずに、毎日を過ごしていきたいと思います。

インドの子どもたちと出会う



丹澤絵美
学生

私は、過去に児童労働をしていた子どもたちはどのような子たちなのだろう、と不思議でした。しかし、実際に会ってみるととても元気がよくて驚きました。みんな1人1人しっかりしているし、軍隊、警察、技師などきちんと夢を持っていました。日本の子どもたちにはないものを彼らはもっていると感じました。一緒に遊んだ時も、私たちが持ってきた日本の縄跳び、フリスビー、シャボン玉などで心から楽しんでくれて、笑顔がすてきで、こちらが元気をもらえた気がします。そのときの彼らの笑った顔をみると、本当に過去に児童労働で辛い経験をしていたのだろうか？と疑問をもってしまうのでした。そのように私たちに感じさせ、過去をのりこえた彼らもまたすごいなと思いました。また、一番好きな時間は？と聞いたとき、私は「友だちと遊ぶこと」と答えると思いましたが、彼らの答えは「勉強」でした。勉強しやすい環境にいる私たちは一番好きな時間が勉強だとは思わないし、少し申し訳なく感じました。もうひとつ私が驚いたことは、親が働く気が全くなくて子どもが働かせられていたということです。親の収入では足りないということではなく、全てを子どもに託しているということに衝撃を受けました。しかし、子どもたちはそのことに対して親には「何で働かないの？」とも聞かず、自分で働くのです。日本では親が働くことが当たり前であるが、インドの子どもたちはそう思っていない子が多いと感じました。

児童労働をしていた子どもたちを助け、バル・アシュラムで子どもたちに勉強を教えたり、職業訓練をさせたりしているBBAの力はすごいと思いました。ここまで子どもたちを立ち直らせ、元気に、しっかり成長させているように思います。夜に行われる子ども議会でも、議長がいて、みんなその日のことについて話し合います。「本を返さない」などささいなことだけれど、そのようなことについて真剣に話し合える姿勢も大事だと思いました。

バル・アシュラムの子たちはとてもすてきな子ばかりでしたが、外に出ると、街中で貧しさに困っている子どもたちをよく見かけ、心が痛みました。私たちにパフォーマンスをみせて、お金を求めてくる子もいました。児童労働だけでなく、このような貧しい子どもたちも救いたいと思いました。

インドで学んだ7泊9日



鶴見 早織
学生

※子どもたちと一緒に遊んだ時の写真です。

私は今回初めてインドに行きました。私の中でインドといえば宗教・貧困・児童労働というイメージがありました。しかし、実際インドの空港に着いた時に日本よりも華やかな空港内に本当に途上国なのかなと疑ってしまうほどでした。

デリー市内は多くの人が行き交っていて、特に車の数が多く渋滞とクラクションが頻繁に鳴り響き、私の予想を上回る活気のある町でした。

デリーではBBA・ILO・TARA PROJECTを訪問し、活動家の方から直接話を伺う事が出来ました。その中で特に印象に残っている話があります。それはBBAで活動をしているジュビルさんの話です。ジュビルさんは活動家で、時には身の危険を伴う事があるそうです。しかし、「自分は二の次で、例え怪我を負っても子どもたちを救う事が私たちの使命だから決して諦めない」と力説していたのを聞いて、生半可ではない強い意志に圧倒されてしまいました。今後、ジュビルさんの様な活動家が若い世代の人に広まれば、児童労働の関心が社会で高まり、働く子どもが減るのではないかと思います。これまで活動家の方と直接話したりする機会は滅多になかったので、貴重な時間を持つ事が出来て本当に良かったです。

インドでは児童労働の話聞くだけではなく、実際にバル・アシュラムという子どもの保護施設を訪問しました。そこへはバスで6~7時間です。途中私が乗っていたバスのクーラーが故障してしまい、暑さからしばらくは窓を開けて走っていました。しかし、車の多いインドでは排気ガスと砂ぼこりで息をするのが苦しく、目に砂が入ったりしました。そんな横で平気な顔をして窓を開けて運転しているインド人がいて、流石は現地の人は違うなと体感させられるエピソードでした。

バル・アシュラムには夜着き、子どもたちには次の日に会いました。初めは子どもたち全員が昔働かされていた経験を持っていたので、今もショック状態の子が多いのではないかと思います。しかし、多くの子が笑顔で元気だったので、驚いた半面ほっとしました。子どもたちの中には前向きな子が多く、昔の事を思い出すのは辛いけど、自分の様な労働をさせられる子どもを無くしたい、と語った子もいました。彼らはまだ子どもだけど、社会の事とか将来の事をちゃんと考えていて本当に凄いなと思わされる事が沢山ありました。私自身学ぶべき事が多かったです。

インドでの出来事は驚きの連続で、行ってみないと分からない事がまだ沢山あるのだなと感じました。今回学んだ事は無駄にせず、これからの生活に活かして行きたいと思います。最後にスタディツアーと一緒にだった皆さん、色々ありがとうございました。

インド・スタディツアーを終えて



濱 美奈
学生

昨年、児童労働の存在を知りました。それに対し理解を深めようと関連本を読んだり、mixiの児童労働に関するコミュニティに入るなどして情報を集めました。そこで、このツアーの存在を知り参加するに至りました。

参加して得たものが三つあります。一つ目は、児童労働保護活動に関する知識です。スタッフの方々からの丁寧な説明や質疑会を通して、その活動に関して理解を深めることができました。また、全ての訪問を終えた夜に参加者が二つのグループに分かれて、これまでの訪問で得た情報の整理や良かった点、疑問に思った点などをまとめて発表したことがとても頭が整理されて良かったと思います。二つ目は、教育についての関心です。私はツアーへ参加する前は、児童労働の根底にはその親の貧困があるため、その経済活動を改革すれば児童労働撲滅に繋がると思っていました。確かにそれも一つの意見ですが、このツアーを通して、もう一つ重要な原因があることに気付きました。それは教育です。教育を受けていない子ども達は自分が持っている権利を知らないため、周りにおとなの言うことを聞く以外に生きる方法がないと必然的に思ってしまう。しかし、自分の権利を知っていれば、それが行使されていない場合そのおとなに抗うことも出来、さらに自分の人生を自ら切り開いていく希望が芽生えます。実際に、バル・アシュラムで生活している子ども達の夢は大きく、それを語る目はとても輝き、表情はいきいきしていました。その夢の内容は社会貢献に関わるものが多いのも印象的でした。三つ目は、語学についての関心です。ツアー参加者は英語圏の留学経験者が多く、現地の方々との英語での会話をスムーズにおこなっていました。そのような場面に何度も直面し、言語は重要なコミュニケーションツールだということを強く実感しました。

その得たものから発展し、日本の教育と外国の教育の違いについて興味を持ちました。その一番のきっかけは、バル・アシュラムの16歳の男の子と話した際、英語教育を私と同年齢受けている彼は、私と違って流暢な英語を話したことです。私にとってそれはとても衝撃的な問題でした。日本の教育を軸に各国の教育を比較し、日本の教育制度を見直したいと思いました。

スタディツアーでは観光では見られないような景色や現地の人々との交流がありました。またツアーで興味がある国に行きたいと思います

インド・スタディツアーを経て



藤沢 麻梨子
学生

『現状を知りたい』

大学1年のとき、ある一冊のチョコレートに関する本を読んだ。カカオ農園で働く子どもたちは、学校を中退し、親元を離れ、将来の希望もない闇の中で働き続けている。“カカオの国の子どもたちは、チョコレートを知らない”のだ。この本を読んですぐにパソコンを開いた。子どもたちはどのような状況で働かされているのか、国際機関やNGOはどのような取り組みをしているのか。論文や国際機関の出しているワーキングレポートから調べるだけでなく、現状を知りたい！それが私がこのツアーに参加した理由だった。

『子どもたちとの出会い』

バル・アシュラムでのオリエンテーションで、私たちが自己紹介をすると、子どもたちは好奇心で目を輝かせながら大きな声で一人一人の名前を復唱してくれた。言葉の通じない私たちに対してもっと人見知りをするのかと思っていたが、手に名前を書いて見せたり、積極的に話しかけてくれた。子どもたちと一緒に遊んでいると、辛い過去を経験しているということをつい忘れてしまうくらい元気で、笑顔に溢れていた。働いていた時のことを聞くと、ある男の子は、ホテルで働いていたことを話してくれた。彼は1日に15時間、休むことも食事も十分に取らずに働いていた。当時一番辛かったことは、おとなに殴られることだった。彼はどんなに辛くても、親が子どもの稼ぎに頼って生活していたので、家族の為に働き続けていたそうだ。今彼が一番好きなことは“勉強すること”だ。また、他の子どもたちに将来の夢を聞くと、“たくさん勉強して将来は医者になりたい。”“アクティビストになって、今も働かされている子どもを助けたい。”辛い経験を乗り越えて、一生懸命学んでいる姿や、子どもたちの笑顔にはすごく強いパワーを感じた。子どもたちは自分の置かれた環境を黙って受け入れてしまう。だからこそまずおとなが責任を持って子どもを守るという意識を持ち、一人一人の権利が認められ、勉強することのできる環境作りをしていく必要がある。子どもの健康な成長には、人から愛されることや、意見を聞いてもらえるという人間関係の構築が本当に大切だと思った。

『私にできること』

今後私に何が出来るのか？簡単に答えを出すことはできないけれど、近い将来は、途上国のサプライチェーンに対して、人権、労働CSRを働きかけることで労働の場から児童労働を予防することや、貧困削減に携わるような仕事に就きたい。

驚きと感動であふれていたインド



松浦 梨菜
学生

私は、バル・アシュラムの子どもたちに出会い、子どもたちの明るさと心の強さにとっても驚きました。児童労働という経験をしながらも、無邪気に遊び回り、楽しんで勉強をし、それでも労働していた時のことを私たちに話してくれたからです。雇用者や警察に叩かれ恐ろしくて反抗できずにいたと聞いたとき私は、なんでこんな小さな子どもがそんなに怖い思いをしなけければいけないのだろうとすごく悲しくなりましたし、きっと私には想像ができない位つらい経験だったのだろうなと思いました。しかし、子どもたちは私たちに伝えるためにその当時のことを思い出して話してくれて、まだ働いている子どもがいるということも教えてくれました。児童労働がなくなって欲しい、と子どもたちは心から願っているように見えました。おとなになったら労働している子どもたちを助けに行きたいという夢を持っている子もいて正直驚きました。

私は、児童労働をなくす活動にはBBAに所属する方々のようなとても熱心なおとなも絶対に必要だけれど、実際に労働を強いられた子どもこれから活動の大きな力になると思います。子どもが訴えることで耳を傾ける人も多いだろうし、自分と同じような状況下の子どもを助けたいと思う気持ちをおとなよりも一層強く持っていると思うからです。救出した後、子ども同士だからこそできる心の傷の癒し方もあると思います。その役目を果たす場所であるバル・アシュラムに行って、このような施設の大切さを感じました。

また、「子どもにやさしい村」プロジェクト実施地の村人の方々と触れ合いましたが、そこには日本では感じる事ができない雰囲気がありました。誰にでも「ナマステ」と言ってくれる村人の心優しさや、私たちを歓迎してくれニコニコしながらこちらを見る子どもたち、それを見守る嬉しそうな先生方、村の発展を目指す年配の方々の真剣な表情に感動しました。物や設備は十分ではないのに、人々の間にはどこか深い絆があるように思いました。言葉はわからないけれど、わいわいと盛り上がりだってきたこと、小さな女の子や男の子と手をつないで笑顔で一緒に砂利道を歩いたことは本当に楽しかったし、良い思い出となりました。上の写真は村での学校説明の時に、私と目があって笑顔になってくれた男の子です。

施設や村の子どもたちの笑顔は今でもはっきりと目に浮かぶくらいとても素敵でした。私にできることは、そんな子どもたちが住むインドで皆が平等に教育を受けられ、素晴らしい人生を送ることが出来るようになることを願って、学んだことを身近な人に伝えることだと思います。楽しかった思い出だけで終わらせずに、今後の人生にこのツアーを役立てたいと思います。

私の目で見えてきたインド



村田 玲
学生

インドに対するイメージは華やかな衣装、カースト制度、毎日カレーが食べられる、世界一の動物の事故死が多い国と思っていた。だがこれも間違っていないと思う。こういった自分のほんの少しある知識と共にインドに行ってみた。百聞は一見にしかずという言葉があるように、実際は自分の想像していたほどではなかった。道路もちゃんと舗装されていてビルもあり車もあった。第一印象はよかった。しかし油断はできない。夜の一人歩き、窃盗には要注意。頼もしいガイドさんと、ホテルもちゃんとしたところに泊まっていたおかげで、このような事件は起きなかったけど、やはりどこの国に行っても同じだなと思った。インド人はカレーっていう概念はないみたい。私たちが日本で食べているカレーは、私たちの文化で作り出したもので、その源がインドでも本当のところは日本人向きに全て作られている。初日の夕飯はホテル内のレストランで食べたが、カレーという文字を探したが一個しかなく、焦りながらも面白い名前を適当に頼んでみた。味は美味しかった、ただ量が多すぎて途中から飽きた。実際、他のメンバーが頼んだのはほとんど全員日本で言うカレーだった。

二日目からは子どもたちと会えると少し楽しみにしながらも、7時間のバス移動は大変だった。施設に着いた頃には空はすっかり暗くなり、星が綺麗に見えていた。日本の都会とは比べ物にならなかった。でも一番困ったことは虫が部屋に入ってきて、ベッドの上を歩き回られたこと。最初は少し気味悪がったけど、日に日にそれは慣れていった。むしろどういふ風にすれば虫が入ってこないかを学んだ。子どもたちとの触れ合いは何度かあり、通訳さんを間に挟んで会話をした。そして私たちが持って行った遊び道具で何時間も遊んだ。カラっとした暑さは遊んでいるうちに忘れていった。子どもたちの瞳はとも澄んでいて、昔自分たちに何があったかも怖がることなく説明してくれた。私は子どもたちが泣いているばかりかと思っていたが、それどころか赤の他人の私たちが毛嫌いもしなかった。一つ困ったことがある、それは体力が有り余るほどあること。一緒に遊んでいた私はへとへとになっていたけど、子どもたちはまだまだというような感じだった。子どもたちと遊んだ後の夕飯のカレーは美味しかった。野菜カレーだからヘルシーで味も濃くなく、何杯もおかわりをしてしまった。

この他にも村見学や、他の児童労働に関係する事務所へ行って話を聞いた。みんなそれぞれ考えているのだから、ちゃんと目の前の問題に目を向けているなと思った。

今回のツアーで様々な場所に直接行き、話を聞き、状況把握をしてきた。現児童労働のことを知るには一番早い手段だ。最初に書いたように百聞は一見にしかずというのは本当に当たっている。一方的な見方は偏った意見と見方を生み出し、助けたくてもそれが余計なお世話な時もある。このツアーでは学生の自分に何ができるかを考えさせられた。いろんな人権問題などを日本でビデオを観て、本を読むだけで知ったふりでいいのか、と自分に問いかけながら今でも何が本当に自分にできるかを考えている。

インド・スタディツアーを通して



川崎桃恵
ACE インターン

私は今回、インターンという形でこのツアーに関わらせてもらいましたが、ACE でインターンをするまで、児童労働についてあまり知りませんでした。今回のツアーに最初から関わらせていただけること、そしてインドで実際に児童労働をしていた子どもたちに会って話が聞けるということも、私がこのインターンにとっても興味を抱いた一つの理由でした。

インドでの私の一番の衝撃、そして深く心に刻まれたことは、バル・アシュラムへ行って、子どもたちと話をしたことです。どの子どもたちも以前は児童労働をしていたという過去があり、きっと何を聞いても、いきなり来た私たちに、最初から心を開いてくれないだろうと考えていたからです。しかし実際、その子どもたちは私たちの質問に対してどんどん答えてくれ、むしろ話しかけてくれたりもしました。児童労働の過去を話してくれている姿を見て、思わず「辛かったことを思い出して語るのは嫌じゃないですか？」と聞くと、「もちろん思い出すことも辛い。でも、自分たちの経験を語ることで、児童労働のことをもっと多くの人に知ってもらいたい。」と答えてくれました。自分の経験を多くの人に知ってもらうことで児童労働をなくしてほしい、との思いが伝わってきました。また、「バル・アシュラムから出たら将来何をしたいですか？」と聞くと、「まだ児童労働をしている子どもたちを助け出して、学校へ行けるようにしてあげたい」とえてくれ、心を打たれる思いでした。

ここで子どもたちと話して気づいたことは、以前は児童労働ということさえ意識せず、働いていた子どもたちが、バル・アシュラムにきて子どものあるべき姿を学び、児童労働がいけないということ、そして、それをなくしていきたいと思えるようになったということです。

私がこのツアー全体を通して感じたことは、教育のもつパワーです。バル・アシュラムでも、「子どもにやさしい村」プロジェクトの実施村でも、子どもたちはしっかりと夢、また考えを持っていました。児童労働をしていたころには持つことのできなかった夢や希望も、正しい教育を受けることによってそれを膨らませることができると感じました。また、教育は子どもに限ったことではなく、おとなの考えも変えていけるものだと感じました。「子どもにやさしい村」で出会った青年グループや女性グループは、今では教育の大切さを理解し、さらに村の改善にも自ら取り組んでいました。家族や地域で密接するおとなが、子どもに学校に行ってもらいたいという思いを抱くことは大きな原動力になると思いました。

児童労働はとても大きな課題で、以前は深く考えたこともありませんでした。しかしこのツアーを通して、子どもたちや児童労働を救出する団体と関わる中で、児童労働の問題はもはや遠い存在ではなくなりました。児童労働をなくすために私にできることを、たとえ小さなことでも今後進めていきたいと思えます。

5. 参加者名簿

	氏名	職業	在住地
1	栗津 知佳子	日本財団 職員	インド・デリー
2	今井 仁志	家庭教師	東京都
3	岩崎 愛	津田塾大学 学生	東京都
4	金澤 巧真	明星大学 学生	東京都
5	具志堅 詩織	早稲田大学 学生	東京都
6	二郎丸 明里	東京女子大学 学生	東京都
7	新谷 太郎	東京学芸大学 学生	東京都
8	高澤 綾	明星大学 学生	神奈川
9	田中 彩由美	専修大学 学生	東京都
10	丹澤 絵美	明星大学 学生	東京都
11	鶴見 早織	明星大学 学生	千葉
12	濱 美奈	東洋大学 学生	東京都
13	藤沢 麻梨子	早稲田大学 学生	神奈川
14	松浦 梨菜	東京女子大学 学生	東京都
15	村田 玲	明星大学 学生	東京都
16	毛利 聡子	明星大学 教員	東京都
17	川崎 桃恵	ACE インターン	東京都
18	成田 由香子	ACE スタッフ	東京都

※1～16の参加者はあいうえお順(敬称略)

編集:成田由香子、川崎桃恵

2012年1月13日